

「束縛と解脱を考察する第十六章」

本性が有ることの理由を否定する>束縛と解脱が本性として有ることを否定する>本義>章の著述を説く>輪廻と涅槃が本性として成立したことを否定する> [輪廻が本性として成立したことを否定する]

ここに言う。「諸事物の本性とは、まさしく有る。(何故ならば) 輪廻が有る故である。ここで輪廻するので輪廻であり、行くので、他の衆生へと行くことを輪廻という。もし、諸事物の本性が有るのでなければ、その時、誰が衆生から他の衆生へと行き、輪廻するとなろうか。行が有るのではない石女の子らは、輪廻すると見られない。それ故に輪廻は有るので、諸事物の本性もまさしく有るのである。」

輪廻が本性として成立したことを否定する>取られものである蘊が輪廻することを否定する>

[恒常が輪廻することを否定する]

述べよう。もし、輪廻そのものが有るならば、諸事物の本性も有るとなるものであるが、有るのではない。

ここで、もし輪廻が有るならば、必ず諸行か、一有情がそうなるかと問われる。「双方(どちら)のようであろうとも、過失がある。」と説かれた。

もし、『行が輪廻する』といえ、
それらは恒常であれば輪廻せず、
無常であろうと、輪廻するとならない。
有情についても、この次第は等しい。 1

そこでもし、諸行が輪廻すると考えるならば、恒常か無常の何れが輪廻するのか?そこで、恒常のものは輪廻しない。(何故ならば) 行為と離れた故であり、壺等の諸々の無常のみが行為と共にあると認められる故である。

取られものである蘊が輪廻することを否定する> [無常が輪廻することを否定する]

あるいは無常のものであるならば、それら無常であるものは生じたやいなや壊れるのであるが、それら壊失したものは有るのではないので、石女の子の行の如く、何であろうとも流浪すると何処でなろうか。そのようであれば、諸々の無常も輪廻するのではない。

『何?行とは因と果が一つ一つ連なるので、順次途切れることなく継続して入る、無常となったもののみが輪廻する。』と思えば。

これも不合理であり、先ず、生じるものであるその果においては、輪廻は有るのではない。(何故ならば) 何処からも来ない故と、何処へも行かない故である。壊失したとなった因であるものにおいても、輪廻は有るのではない。(何故ならば) 何処からも来ない故と、何処へも行かない故である。単なる行以外に過去と未来は成立していない故と、まさしく失壊したごとと、生じていないことによって、有るのではない故でもある。

もし「後の刹那が生じたならば、以前が輪廻するのだ。」といえよ。

もし前後二つの刹那がまさしく同一であるとなれば、それはそのようになるだろうが、まさしく同一に有るのではない。(何故ならば) 因と果の事物である故であり、眼と色形と眼識等の如くである。

他にも、まさしく同一であれば、前刹那、後刹那と述べられること自体にもならないだろう。同一時である時、「一人の祭祀が前と後になる。」と述べられることは無く、その如く、ここでも同一である故に、前刹那や後刹那と名付けられること自体にならないだろう。

他にも、「前刹那が失壊した。」とはならない。(何故ならば) 別ではない故に、後刹那の如くである。「後刹那が生じた。」ともならない。(何故ならば) 別でない故に、前刹那の如くである。

「何？まさしく他であれば輪廻するのである。」といえよ。

そう見るならば、他である凡夫が輪廻に生まれることが有る故に、阿羅漢方も輪廻するとなり、「他の灯明が燈れば、消えた灯明も燈る。」ともなるだろう。

他にも、後刹那は前刹那が失壊したか、失壊していないか、壊れつつあるものの何れより生じたか？そこでもし、失壊した(刹那)よりであると主張すれば、焼けた種子よりも芽が生えるとなるだろう。それ故に、無因となるだろう。

「何？失壊していない(刹那)よりである。」といえよ。

そう見るとしても、種子は様相として変化が無くとも芽が生えるとなり、因と果の二つも同一時になるが、生が無因ともなるだろう。

もし、「滅しつつある(刹那)より生じる。」といえよ。

壊れつつある(刹那)よりも生じることは無い。(何故ならば) 失壊した(刹

那) と失壊していない (刹那) より以外に壊れつつある (刹那) は無い故と、失壊した (刹那) と失壊していない (刹那) についても、過失が既に述べられた故である。それ故に、因果の構成や、前後の刹那の構成が有ると、何処でなろうか。

前後の刹那の構成や、因果の構成が有るのではない時、継続も有るのではないけれど、それが無いので、輪廻も無い。それ故に、無常の諸行にも輪廻は有るのではない。

輪廻が本性として成立したことを否定する>取る者である有情が輪廻することを否定する>

[蘊より別本質の有情が輪廻することを否定する]

ここである者が、「合理と離れた故に、諸行が輪廻しないことは真実であり、ならば何かといえば、我が輪廻する。」とすることをする。

述べよう。

「有情についても、この次第は等しい。」

何故ならば、「有情が輪廻する。」と言えば、「これは、恒常のもの (が輪廻するの) か? 無常のものが輪廻するののか?」と尽く分析したならば、諸行が輪廻するとは不合理である次第は、有情についても等しいとなる故に、有情も輪廻するのではない。

取る者である有情が輪廻することを否定する> [蘊より自とも他とも述べられないプトガラが輪廻することを否定する]

ここで言う。「諸行が輪廻するとは不合理であるさまは、有情にも等しくなるとは適當ではない。何故ならば、『恒常か無常となった諸行のみにおいて、輪廻はあるのではない。』と言ったけれど、我はそのように恒常か無常となるものではない。このように、それは諸蘊よりそのもの (自性) か他であると不可説であるように、恒常とも無常性とも不可説とされる。それ故に我のみが輪廻し、以前に示された過失である背理ともならない。」

述べよう。

もし、プトガラが輪廻するといえば、

諸々の蘊と處と界に、

それを五つの様相で探して、

無ければ、何が輪廻するとなろうか。 2

もし、「プトガラ」という何かがあるならば、それが輪廻するとなるものであ

るが、有るのではない。何故ならば、諸々の蘊と處と界を五様相で探したならば、有るのではない故である。どのようにといえば、

「木そのものは火ではなく、木より他に火も無い。火は木を具えるのではない。火に木は無い。それにそれは無い。火と木によって、我と近く取るものの全ての次第は、」¹

というが如く、「我は蘊と處と界の本性を持つものではなく、それらより別でもないが、蘊と處と界を具えるのでもなく、我に蘊と處と界は無く、蘊と處と界にも我は無い。」と、そのように前述した論法によって、五つの様相で探したならば、我は有るのではない。そのように、諸々の蘊と處と界を五様相によって探したけれど、そのように有るのではないものは、それが無いので、如何様に輪廻するとなろうか。そう見れば、我にも輪廻が有るのではない。(何故ならば)石女の子のように、無い故である。

他にも、この我は

近取より近取へと

輪廻するならば、有²は無くなるだろう。

有が無く、近取が無ければ、

それは何が輪廻するとなろうか。 3

もし有が、近取が無くともこれが輪廻するに適うとなれば、我が輪廻するとなるに至るものである。如何様にそこで、まさしく近取が無いのかという背理を示す為に、

「近取より近取へと輪廻するならば、有は無くなるだろう。」

と説かれた。

ここで、人の近取より天の近取へと行くならば、人の近取を手放して天の近取へと行くのか？手放していないのか？と問う。

先ず、もし「完全に手放して行く。」と述べるなら、その時以前の近取を手放した故と、後を取っていない故に、それらの中有³が無くなるだろう。ここに有と離れたことが有るので、有は無。有とは近取の五蘊であり、それらと離れたとなるだろう。有が無く近取が無いものは、五蘊と離れたことによって、名付けられる近取の因（拠所）と離れた故に、無因となる。しかし、近取無く明らかにするものと離れた、明らかでない無因のものとは何であろうか。それは何もものでもなく、「それはまさしく有るのではない。」という意味である。それ

¹ 「木その…無い。：『根本中論』第 10 章 14 偈・15 偈前 2 行。

² 有：輪廻での生。

³ 中有：前世で死んで来生に生まれる前の、中間の有（輪廻）。

が無いので、(未だ) 無である、起こるだろう天の近取を得る者は有るのではない故に、何を輪廻するとなろうか。そこへ輪廻するとなるそれも、まさしく有るのではない。

あるいは、「何が」というこれは、輪廻の一部特性の行為であり、それ故に、有るのではないので、輪廻する行為を為すとならない。

そのようであれば、先ず、以前の近取を手放して輪廻することは正しくないのである。

「何？手放しておらず（輪廻するの）である。」といえよ。

そのようであろうとも正理ではない。何故かと言えよ、何故ならば、以前を手放していない故と、後を得た故に、一人の我がまさしく二つの我となるが、これは主張するものでもない。それ故に、手放しておらず輪廻することも有るのではない。

「何？前後二つの有の間に中有の蘊が有るので、それらがそれを近く取ることと共にある故に、近取から近取へと輪廻しようとも有が無い背理にはならない。」といえよ。

それも不可であり、中有の蘊において輪廻するにおいても、以前の有を手放す・手放さないという面より背理となることは等しい故である。

「一度に手放すことと取ることをする故に、過失はない。」といえよ。

述べよう。一方が以前の近取を手放し、一方が中有の近取へと駆けるのか？あるいは我性全てによってであるのか？と問う。

そこでもし、『部分によって。』と考えるならば、その時、「まさしく二人の我である背理となる。」と、過失を既に述べた。

もし「我性全てによってである。」といえよ、そう見るとしても、君達にはまさしくその背理となるだろう。違いはこれ一つだけ有り、中有へ動くならば非常に近いので、短時間近取が無くなるということである。「我性全てが手放す」と「(我性全てが) 取る」という別のものごとの主体が、一つの事物に一度に見られるのもない。たった一人の祭祀が家から家へと移動するにあたり、同一時に我性全てが放し(発ち)、取る(着く)という二つの行為が有るのではない。

「何？一方の足によって一方が放たれる(踏み出される)故と、他方を引く

故に、一緒に放ち、取ると考える。」といえは。

そのようであれば、二本の足の如く我もまさしく二つとなる。(何故ならば) 一部が以前に留まる故と、一部が後に留まる故に、まさしく複数の部分である背理となるだろう。それ故に、同時であるとしても手放すことと取ることは有るのではないので、これは全く返答にならない。それ故に、中有が得ることについてもまさしくその過失である背理となるので、一切の様相において、我にも輪廻は有るのではない。

諸行と我が輪廻することは有るのではない時、「輪廻はまさしく無い。」と納まる。

輪廻と涅槃が本性として成立したことを否定する > [涅槃が本性として成立したことを否定する]

ここで言う。「輪廻とはまさしく有る。(何故ならば) 対するものが有る故である。ここで、有るのでないものにおいては、対するものが有るのではない。例えば、石女の子の敵の如くである。輪廻に対するものである涅槃は、有るが、それ故に、輪廻もある。」

述べよう。「もし、その対するものである涅槃が有れば、輪廻は有るとなるが、有るのではない。」と説かれた。

行が苦しみを超越するとは、
如何様にも不合理である。
有情が苦しみを超越するとも、
如何様にも合理とはならない。 4

もし、「苦しみにより超越する (涅槃)」という僅かな何かが有るならば、それを考察すれば、恒常か無常である諸行の一方に考察が問われる。そこで、変化が無い恒常においては、苦しみにより超越することによって何をする事になるか。有るのではない無常の諸物においても、苦しみにより超越したことによって何をするのか。一切が前述と等しい。「如何様にも、」とは、「如何なる様相によっても」という意味である。

「何? 有情において、苦しみにより超越すると考える。」といえは。

それも前述のように、恒常か無常であることから合理ではない。

「何？まさしく恒常か無常であると不可説のものについて考える。」といえは。

そう見るならば、不可説である故に、輪廻のように、涅槃においても「我は有る。」と承認したことになるのではないか？

他にも、不可説とは近取と共にある我のみにおいて適正であるが、苦しみより超越した（涅槃を得た）ならば近取は有るのではないので、これにおいて、まさしく不可説であることが何処にあらうか。

あるいは、我は、それ自体か他であると不可説になるとはしよう。しかしながら、これは有る涅槃か、あるいは無いものであるか。もし有るならば、その時、解脱を得たとしてもそれは有るので、まさしく恒常となるだろう。あるいは無ければ、その時、我は無常となるだろう。それ故に、「我はそれ自体か他であると不可説であるように、まさしく恒常や無常であるとも不可説である。」とはならない。

「何？涅槃を得たならば、我は有性とも無性とも不可説であると主張する。」といえは。

そう見るとしても、これはその時、一つの所知⁴なのか？あるいはそうではないのか？

もし「所知である。」といえは。

ならば輪廻のように、涅槃を得たとしても所知である故に、この我は近取ではない。あるいは知覚されなければ、その時これは所知ではない本性である故に、虚空の花のように無いので、これがまさしく不可説として何処にあらうか。

それ故に、そのように涅槃も有るのではないが、それが無いので、輪廻も無い。

まさしくそれ故に、『般若母』より、

「生者、須菩提よ。涅槃も幻の如く、夢の如くである。生者、須菩提よ。

仏陀の諸法も幻の如く、夢の如くである。」

等より、

「種姓の子よ。もし、涅槃より甚だしく優れた他の法が有るとしても、『それも幻の如く、夢の如くである。』と、私は言う。」

⁴ 所知：知られる対象。

や、その如く『聖三昧王經』よりも、

「勝義諦⁵は夢に似ており、涅槃は夢に等しいとなる。賢者がそのように入ることも、それは心意の最高の律儀であると述べられる。」

や、その如く

「滅諦⁶は夢そのままであり、涅槃も夢のかくある如くであると、それに菩薩が言葉を当てる。それは言葉の律儀であるという。」

と説かれた。

章の著述を説く > 束縛と解脱が本性として成立したことを否定する >

[束縛と解脱が本性として有ることを共通に否定する]

ここで言う。「もしまた、君が輪廻と涅槃の二つを否定はしたけれど、そう見るとしても、束縛と解脱は有るのである。有るのではない事物の本性においては、束縛と解脱は有るのではない。それ故に、束縛と解脱が有る故に、諸事物の本性はまさしく有る。」

述べよう。「もし、束縛と解脱の二つそのものが有るならば、諸事物の本性は有るとなるが、有るのではない。」と説かれた。

生壊の主体である諸行は、
束縛せず、解脱するとならない。
先の如く有情も、
束縛せず、解脱するとならない。 5

ここで、貪欲等の煩惱であるものは、束縛されるものである諸物を自由無くするので「束縛である。」と名付け、「それが束縛したので、凡夫達が三界を超越しない」と意味を置けば、まさしく束縛するものと考察された貪欲等の、その「束縛」とは、先ず、生と壊の主体である刹那滅⁷の諸行においてあり得ない。(何故ならば) 生じたやいなや壊れ、無くなった諸物は、有るのではない故である。貪欲等の束縛するものが断滅する性相を持つ解脱もあり得ない。(何故ならば) 無常の諸行は、まさしく有るのではない故である。「先の如く」とは、「前述した論法によって」という意味である。前述の様相によって諸行に束縛と解脱が有るのではないように、先の如く有情も束縛せず、解脱するともならない。そのようであれば、束縛と解脱も無い。

⁵ 勝義諦：聖なる真実。[序論] 脚注 63 参照。

⁶ 滅諦：苦しみとその原因を滅した聖なる真実。四聖諦（[第 1 章] 脚注 166 参照）の一。

⁷ 刹那滅：無常の定義。一瞬一瞬滅すもの。

束縛と解脱が本性として成立したことを否定する>それぞれに否定する> [束縛が本性として有ることを否定する]

ここで言う。「もしまた、諸行や有情に束縛が有るのではないと見るとしても、『貪欲等の近取』という束縛するとなるものは、有るのである。それが有るので、束縛も有るとなるだろう。」

述べる。もし、何らかの事物が束縛するならば、近取は束縛するともなるが、束縛するのでもない。如何様に束縛しないかを示す為に説く。

もし、近取が束縛するならば、
近取と共にあるものは束縛するとならない。
近取の無いものは束縛せず、
如何なる場合に束縛するとなろうか。 6

そこで、「近取と共にある」とは、「近取が有る」であり、先ず、その事物は束縛するとならない。近取と共にあるものは、まさしく束縛されたとなったものであるが、そこで再度束縛するものと関係して何をすると成ろうか。近取の無い、近取と離れたものも束縛しない。(何故ならば)束縛することと離れた故に、如来の如くである。「近取の無い、束縛するものと離れたものが束縛する。」とは、互いに反する故にも、これは正しくない。

そのように確実に考察したならば、近取と共にあろうが近取と離れようとも構わないが、束縛しないそれは、ここで、如何なる場合になったものが束縛するとなろうか。『束縛するとなるものの他の場合とは、何も有るのではない。』というお考えである。

そのように理解したならば、束縛するものが如何なるようにも束縛することをしない時、何も束縛をなさない近取である貪欲等が、まさしく束縛するものであると何処で成ろうか。それ故に、束縛も無い。

他にも、

もし、束縛される対象の以前に、
束縛するものが有れば、束縛するに至る。
それも無く、・・・

ここで、「束縛される対象より別に、以前に成立した鎖等の束縛するものが、束縛される対象である祭祀を束縛する。」と見られるが如く、束縛される対象である諸行かプトガラの前、束縛するものである貪欲等が成立したとなれば、以前に成立したそれによって諸行かプトガラを束縛するとなるに至るが、それ

は有るのでもない。(何故ならば) 拠所が無いので貪欲等は成立していない故と、以前に束縛するものが成立した上で、後に束縛される対象と一緒に関係することは必要性が無い故と、束縛するものより別に成立した束縛(されたもの)においても、束縛することは必要性が無い故に、束縛される対象の以前に束縛するものが成立したことは無い。それ故に、束縛するものは何も束縛しないが、何も束縛しないものは、束縛するもの自体として適さないので、束縛するものは有るのではなく、束縛するものが無いので「束縛(されたもの)も無い。」と成立した。

何かここで、批判が当たることとなった

・・・・・・・・残りは、

偈の読み方の順番を変えて、

過ぎた・過ぎていない・歩むによって示した。 7

と理解すべきであり、「先ず、束縛したものは束縛せず、束縛していないものをも束縛するとならない。束縛したと束縛していない以外に、束縛しつつあると知ることはない。」⁸等によって当てはめる。

それぞれに否定する> [解脱が本性として有ることを否定する]

ここで言う。「仮に、君が束縛するものを否定したとはしようが、そう見るとしても大慈悲をお持ちの如来方が、守護無く輪廻の牢獄に縛られた有情達へ、戒律と禅定と智慧の我性である三つの集積を近しく教示された目的である解脱とは、先ず有るのである。しかし束縛されていないものに解脱は無く、それ故に、束縛も有る。」

述べよう。もし解脱そのものが有るならば、束縛が有ることになるだろうが、有るのではない。ここでこの解脱を考察すれば、束縛されたか、束縛されていないものに考えられるものである。それよりどうなるかといえば、「双方のようであれども正しくない。」と説く。

先ず、束縛されたものは解放されず、
束縛されていないものも、解放されるとならない。
束縛されたものが解放されつつあるとなれば、

⁸ 「先ず、・・・ない。」:『根本中論』第2章1偈の言葉を変換する。

束縛と解放が同一時となる。 8

そこで、束縛されたものに解脱は有るのではない。(何故ならば)束縛された故である。

「何?束縛されたとなったものが、後に方便によって解脱するとなる故に、束縛されたもの自体が解放されるとなるだろう。」といえよ。

ならば、「束縛されたものが解放される。」と述べられるのではなく、ならば何かといえよ「解放されたものが解放されるとなる。」となるだろう。

もし、「現在に近いので、そのように述べられる。」といえよ。

もし、何らかにおいて解脱が有るならば、その時それと近く有るとなろうが、如何なる場合においても解脱しようとする時、束縛されたものに解脱はあり得ないので、解脱は無いと示そうとする時、まさしく現在と近いことが何処に有ろうか。そのようであれば、先ず、「束縛されたものは解放されない。」ということに留まる。

ここで、束縛されていないものも解放されるとならない。それが解脱そのものであるならば、それにも解脱が何をするとなろうか。再度解脱に相互関係する故に、解放されたとなった阿羅漢方においてもまさしく束縛するものが有るとなり、それ故に阿羅漢も束縛されたとなるだろう。それ故に、束縛されていないものも解放されない。

『何?束縛されていないものにおいて解脱はあり得ない故に、まさしく束縛されたものが解放されるとなるだろう。』と思えよ。

そう見るのであれば、束縛されたものを解放されつつあると考えるならば、束縛されたものである故と、解放されつつあるものである故に、束縛と解放が同一時となるが、同一時に束縛と解放は合理でもない。(何故ならば)互いに反する故に、光と闇の如くである。それ故に、そのように束縛されたものと束縛されていないものに、解脱が有るのではない。それ故に、解脱も無いが、それが無い故に「束縛も無い。」と成立した。

章の著述を説く > [涅槃の為に努めることは無意味とする背理を斥ける]

ここで、「もしそのように、君が輪廻と涅槃を否定し、束縛と解脱も否定した

ので、愚痴の厚い闇を持つ様々な悪見の非常に硬い蔓が聖なる道を遮断した輪廻の大荒野、粗密（の煩惱）の毒樹が異熟した果である、生等の非常に不快な無辺の様々な苦しみを多大に与えることによって遮蔽した、二十の頂きが余りにも高い有身見の非常に堅強な大山が全方向を囲む、対象の快樂を望む非常に滑り易く広大な水際を具え、絶え間なく流れ落ち廻る欲望の大きな濠より超越したいと望む、解脱を求める者達が最も休息する善法への強い希求である『我は何時（輪廻の生を）取ること無く、涅槃へ赴くとなろうか。涅槃は我がものに何時なろうか。』と思うことが全く無意味となり、そのように善法へ希求を生じさせる者達の、善知識に親近することや、涅槃を得る目的を持つ布施や持戒や聞思修等の次第であるものも、無意味になるだろう。」と言っている。

述べよう。そのように一切事物は本性が無く、影像や、蜃気楼の水や、旋回する火の輪や、夢や、幻や、錯覚と等しく、我や我所（我がもの）と離れていながら、（或る者は）錯誤に後続する故に、「私」「私の」という、我を捉え、我所を捉える心的作用が尽く執するので、まさしくその有身見が突き動かして、

我は、取ること無く苦しみを超えるだろう。
涅槃は我がものになるだろうと、

誤って思い込み、

そのように執する者の、
近取は大きなとらわれである。 9

「我は、近取無く、取ることと離れた涅槃を得よう。」「そのように入ることとなった涅槃は、我がものとなるだろう。」と、そのように解脱を欲す者が捉えることになるそれらにおいて、「我執」や「我所執」という近取である有身見そのものが、大きなとらわれである。しかし、そのような様相の強いとらわれである諸々の頑かな執着において、寂靜は有るのではない。（何故ならば）執を残らず捨て去ったのみより解脱を得る故である。

『我』と『我がもの（我所）』と思うとらわれに執着する限り、『涅槃というものが有る。』と執着する限り、近取を手放すこと等に執着する限りは、正しい方法ではないので、涅槃を追求する者達の一切の努めは、確実に無意味となるだろう。それ故に、解脱を求める者は、それら一切を完全に手放したまえ。

何故ならば、一切の様相において、勝義である

何かに、涅槃が生じさせられることは無い。
輪廻を斥けたことも、有るのではない。

という。

それに、輪廻とは何ものであるか。
涅槃も何が考察されようか。 10

勝義諦である何かを認識していないことによって、涅槃が生じさせられる一涅槃であると捏造されたことは無い。輪廻を斥けた一輪廻が完全に尽きたことも有るのではないそこに、尽きさせられる為に考察された輪廻とは、何ものであるか。それが得られる為に考察されたその涅槃も、何であるか。

あるいは、輪廻と涅槃の二つとも認識されていない故に、如何なる有情も涅槃である所へ、輪廻より斥けられ一導かれたことや、涅槃が生じさせられる為の努めを具えることによっても為し得ないそこに、涅槃も何が考察されようか。僅かにも考察に適わない。

分別考察しないことが、確実に斯くも言及した輪廻の荒野より超越し、涅槃の都へも到るとなるだろう。

本義> [了義の教証と合わせる]

まさしくそれ故に、『聖降魔経』より、

「そしてその時、若き文殊によって、罪深き魔が門の横木の縄で縛り付けられたように地上に転がって、『私はきつい縄で縛られた。私はきつい縄で縛られた。』と泣きながら慟哭するような姿であると思われた。

文殊が言った。『罪深き者よ。それによってお前が常に縛られ、耐える束縛ではない、この束縛より他の余りにもきつい束縛が一つ有る。

それも何かといえば、このように、誤った慢の束縛と、欲と見解の束縛である。罪深き者よ。これは束縛であるが、この束縛より他の殊更にきつい束縛は、有るのではない。お前はそれによって常に縛られているのであるが、耐え得る束縛ではない。

他にも、罪深き者よ。仮にお前がもし、再び解放されたなら喜ぶか?』

(魔が) 言った。『喜ぶ。』

それから、善良な夜摩天の一人の天子が、若き文殊へこう言った。『文殊よ。罪深き魔を放してやれ。自分の巢穴に返してやろう。』

そして若き文殊が大変罪深き魔へこう言った。『罪深き者よ。放たれたお前は、誰によって縛られていたのか。』

(魔が) 言った。『文殊よ。我は誰によって縛られていたかは知らない。』

(文殊が) 言った。『罪深き者よ。お前が縛られていないことから縛られたと想った如く、一切の凡夫である幼子は、無常を恒常であると想い、苦を楽と想い、無我を我であると想い、不浄を清浄であると想い、色形が無いものを色形であると想う。諸々の受（感受作用）は無く、諸々の想（識別作用）は無く、諸行は無く、諸識が無いものを、受や想や行や識であると想うのである。他にも、罪深き者よ。お前が解放されるのであれば、何より解放されるとなるのか。』

(魔が) 言った。『我は何からも解放されるとならない。』

(文殊が) 言った。『罪深き者よ。その如く、解放されるとなるそれらも、清浄ではない想であるものを完全に知る以外に、何からも解放されることは無く、それを完全に知って、〈解放された〉という。』

と説かれ、この経証より、正しくない誤りを分別するのみによって縛る藤蔓が、完全に切れることを「解脱」「涅槃」といい、夢の中で認めた燃える火が水によって消された如くである。

本義> [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「束縛と解脱を考察する」という第十六章の解説である。